

## 『看聞日記』現代語訳(二五)

藺部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成(一三七一～一四五六)の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』三(明治書院、二〇〇六年)である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記底本には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳(一)～(二四) 応永三三年～三〇年(一四一六～一三三)

『米沢史学』三〇～三七号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五七号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四九号(二〇一四～二〇二二年)

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永三二年一月一日から四月二十九日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、(一)を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに底本に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からの「ご示教・ご叱正を切に望む。

### 【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』(講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年)

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』(清文堂、一九九一年)

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七・別冊(明治書院、二〇〇二～二〇一四・二〇二二年)

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記法寸考―」(同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年)

同「『看聞日記』の舞楽記事を読む」(『文学部論叢』一三八号、二〇一五年)

同「『看聞日記』人名考証三題」(『日本歴史』八八二号、二〇二二年)

同「『看聞日記』の引用表現について」、『古文書研究』九二号、二〇二一年

松岡心平編『看聞日記と中世文化』(森話社、二〇〇九年)

植田真平・大澤泉「伏見宮貞成親王の周辺―『看聞日記』人名比定の再検討―」(『書陵部紀要』六六号、二〇一四年)

植田真平「伏見の侍―『看聞日記』人名小考―」(『書陵部紀要』七〇号、二〇一九年)

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」(『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年)

松蘭斎『中世禁裏女房の研究』(思文閣出版、二〇一八年)

応永三十一年(伏見宮貞成数え年五十三歳)

(表紙直筆外題)「看聞日記 応永三十一年正月より十二月に至る」

応永三十一年甲辰正月一日、雨が降った。「木徳(※)の治政で、世の中が穏やかに治まっている春だ。人情の厚い風俗に世は従っていて、人々はその恩恵をこうむっている。とても幸せだ」と予祝した。

### 白散を飲む

朝早く漢方薬の白散(びやくさん)を飲んで、いつものように年始のお祝いをした。その後、強飯を食べた。東御方・廊御方・亡き兄の妻であった上臈・今参・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸も共に強飯を食べた。一献の酒宴が終わってから、小川禅啓以下六・七人と対面するなど、いつものように事は進んだ。

聞くところによると、朝廷の元日祝宴の執行責任者は徳大寺実盛大納言、上皇様の御薬にお相伴する役は正親町三条公雅大納言だそう。室町殿は内裏や上皇御所へお出でになった。足利義量将軍も同様である。

※木徳(もくとく)：古代中国の陰陽思想「五徳終始説」による木徳・火徳・土徳・金徳・水徳の一つ。それぞれの王朝の徳や変遷を説明するもの。

二日、晴れていたが、風が吹いていた。年始のお祝いは昨日と同様である。長資朝臣がいつものように朝廷の祝宴に出かけた。上皇様の御薬相伴役は今日も正親町三条公雅だ。

### 妻の庭田幸子、産所から戻る

ところで妻の二条局が産所である庭田家から戻ってきた。生まれたばかりの女児も一緒に来た。

三日、晴。年始のお祝いは昨日と同様である。長資朝臣が帰ってきた。殿上人たちの祝宴は無事終わったそう。

舞には法性寺親平が初めて参加した。法性寺は木幡雅藤朝臣の養子である。もとは法性寺親継の実子だった。これまで地方に住んでいたので、法性寺の立ち居振る舞いは洗練されていなかった。それに、拍

の時は舞わなかった。先輩たちが法性寺に目配せしたが、それでも法性寺は立たなかった。とうとう養父の木幡雅藤が厳しく叱ったので、ようやく立ち上がった。しかし一向に舞うことなく出ていった。結局、末席で立ちながら見物していただけた。よろしくないことだ。

上皇様の御薬相伴役は今日も正親町三条公雅だ。  
四日、晴。歯固め餅を食べた。息子も同様に食べた。その後、新年初の音楽会をした。平調の万歳楽・三台急・甘州・太平楽急・五常楽急と朗詠の徳是(※)、それに鶏徳と林歌。長資朝臣と慶寿丸が合奏した。

※徳是：『新撰朗詠集』帝王六一五「徳是北辰」。

### 千秋万歳が来る

五日、晴。千秋万歳(せんすまんざい)の門付け芸人が来て、いつものようにめでたい言葉を述べていた。今日は朝廷の位を授ける儀式。その儀式で執筆役を勤めるのは、久我清通大納言だそう。

六日、晴。特に何もなし。田向家で闘茶の会があったそう。夜、京で火事があったという。

### 人日の正月七日に雪が降るのは豊作の吉瑞

七日、雪が降った。去年の冬は雪が降らなかった。それなのに人日の今日、雪が降ったのは豊作のめでたい兆しだ。もともと人日のめでたい日であり、それに加えて豊作の吉瑞。いずれにせよ、めでたいことである。

朝早く若菜で人日のお祝いをした。夕方にはいつものように田向前参議らと酒宴になった。さらに廊御方が用意した雪見酒となった。朝廷の白馬宴会、執行責任者は正親町三条公雅大納言だそう。

八日、晴れていたが、時々雪が舞った。用健が来て、新年のお祝いを述べ、お茶十袋をいただいた。ことさらに新年のお祝いをして、用健にはまた、こちらから引き出物を差し上げた。寿蔵主も新年の挨拶に来て、一献の酒を持ってきてくれた。

## 雪見酒

九日、前夜から雪が降り続いた。早朝には雪が六センチから九センチほど積もった。その光景はとても興趣があった。田向前参議と庭田重有朝臣がお酒を持参してきた。私もまたお酒のお代わりを用意して、数献の雪見酒となった。そしてさらには酒盛りになった。面々が深く酔った。私も特に酔っぱらい、散々な雪見になった。

十日、晴。惣得庵主・明元らが酒樽一つを持参して来た。それで田向前参議らも加わり、一緒に酒を飲んだ。いつものように惣得庵主には特別に引き出物を与えた。

聞くところによると、室町殿御所へ新年参賀の人々がいつものように群参しているようだ。

## 疱瘡が流行する

足利義量将軍は二日から疱瘡で寝込んでいるようだ。それで椀飯の儀式にも出なかったという。最近、この疱瘡が流行していて、多くの人が苦しんでいるようだ。

## 犬若の松拍が来る

十一日、晴。犬若の松囃子が来た。いつものように猿楽などの芸を見せてくれた。西大路隆富朝臣が参賀として一献の酒を持参して来た。生島明盛も来た。

## 宮家恒例の新年祝宴

今日は恒例として宮家の男女が一献の酒宴をする日である。いつものように終日、酒宴をして歌や舞を楽しんだ。智俊も酒樽一つを持参して来た。明盛・行光・広輔らが乱舞をしたので、それぞれに扇を与えた。いつもと変わらない恒例の祝宴で、ひたすら新年を祝った。夜に入って、一献の祝宴は終わった。

十二日、晴。行豊朝臣が一献の酒を持参して来た。急に、新年初の連歌会をする事になった。参加者はたまたま今日宮家にいる面々で、夕

方から開始した。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・隆富朝臣・善基・明盛・行光らが参加した。いつものように一献の酒宴から始めた。午後十一時に百韻を詠み終わった。一番目の句を私が詠み出した。

去年こぞかけて 梅は久しき 盛りかな

十三日、晴。大光明寺に行き、焼香した。田向前参議・長資朝臣・行豊朝臣・隆富朝臣・慶寿丸を連れて行った。長老と対面した。お茶のおもてなしを受け、いつものように引き出物などをいただいた。しばらくして帰った。

その後、光台寺へ行った。風呂始めである。風呂に入った後、一献の準備が丁寧になされていた。宮家の男ども皆が酒宴に参加した。五献が終わって、宮家へ帰った。行豊・隆富朝臣は京都へ帰っていった。前典侍禅尼藤原能子殿が酒樽などを贈ってきた。去る十一日は取り乱していたので、送ることが出来なかったようだ。すぐにその酒を味わった。

聞くところによると、室町殿は勧修寺家に居る小川宮のところに参賀したようだ。

十四日、晴。島田定直六条庁官が参賀に来たので、会った。

田向経良の息子である瑛侍者が来た。十日に蔵主寮に移住したようだ。この役職は忙しいですと話していた。

綾小路信俊前参議が参賀に来た。いつものように一献の酒宴を用意してくれた。酒を飲みながら、音楽を奏でた。万歳楽・三台急・太平楽・五常楽急・林歌を演奏した。笛は綾小路前参議、笙は長資朝臣、琵琶は私と慶寿丸、太鼓は田向前参議だった。雅楽以外にもすばらしい朗詠・今様・雑芸などが演じられて、耳を楽しませてくれた。一献が何度も廻って、とても楽しかった。

## 山で鹿が鳴くのは不吉

ところで後に聞いたことだが、今夜、山で鹿が鳴いたそうだ。これは不吉なことだそうだ。先例では凶事と占われているので謹慎すべきでしょうと言われた。

### 回茶(鬪茶)

十五日、晴。いつものように小正月の祝宴をした。綾小路前参議・田向前参議らが参加した。その後、鬪茶をした。参加者各々が懸賞品を持ち寄った。参加者は、二人の前参議以下、寿藏主や行光らである。

### 村人の松拍が田楽の物真似芸をした

鬪茶の最中に、村人たちの松囃子が来た。石井村と山村の松囃子が早く来た。どちらが先に芸を披露するかで喧嘩となった。それで飾り立てた笠などが少し打ち壊されてしまった。しかし何とか宥めて、喧嘩は収まった。石井村が先で、次に山村ということになった。少し田楽の物真似芸があった。面白かった。いつものように三毬杖を焼いた。次に舟津の松囃子が来たが、たいした物真似芸はなかった。

松囃子行列の者たちが帰ったので、鬪茶を再開した。私が一番お茶を飲み当てた。二つの懸賞品を取った。田向前参議が二番目に当てて、私と同様、二つの懸賞品を取った。七回の勝負だった。残った懸賞品はクジ引きで分け合った。鬪茶が終わって、一献の酒宴をした。今年初めての茶会をなんとか行った。

十六日、いつものように身を浄めた。上皇様に年賀状を送った。室町殿にも勤修寺経興中納言を通して年賀状を送った。今日の朝廷、踏歌宴会は一条兼良内大臣が執行責任者だそうだ。このところ、称光天皇陛下はお風邪を召していて、ご欠席だった。

夜に音楽会をした。綾小路前参議が付き合ってくれた。双調の春庭楽・鳥急・颯踏入破・賀殿急・北庭楽・胡飲酒破・陵王破と朗詠をした。次に舞のある万歳楽・長保楽・太平楽・狛杵・陵王・納曾利などを演奏した。

即成院の念仏会に宮家の女性たちや男どもが参列しに行った。

音楽会の後、妻の二条殿も付き合ってくれて、綾小路前参議が用意してくれた酒を三人で飲んだ。この酒宴で、私の精進落としをした。十七日、晴。先日のお礼として宮家の男どもが準備した茶会があった。

参加者は先日と同じである。ただし長資朝臣は欠席だった。風邪らしい。その代わり、聖乗と小川有善が加わった。懸賞品を各々が持参した。私もまた五種類の懸賞品を提供した。聖乗が一番飲み当てた。そしていつものように一献の酒宴などをした。綾小路信俊前参議が

宮家に来ているので、茶会や酒宴を開いたと男どもが言っていた。今春も遊び尽くして、新年を祝った。

### 足利義量の病氣により室町幕府の的始めが延期となる

今日は室町殿御所での始めの行事をする予定だった。ところが足利義量將軍の病氣が治らないので、延期になったそうだ。

十八日、雪が舞っていた。朝早く音楽会をした。舞のある曲、喜春楽・退走徳・採桑老・新鞆鞆・陵王・落躑と朗詠をした。

### 綾小路信俊の息子・有俊が五歳で雅楽を習い始める

綾小路信俊前参議の息子である有俊は、去年の十一月から音楽を習い始めたそうだ。年齢は五歳で、代々この歳から音楽を始めるのが綾小路家の佳例だという。有俊には音楽の才能があると信俊が話していた。めでたいことである。

音楽会の後、綾小路前参議は出ていった。その足で石清水八幡宮に参詣するそうだ。

### 疫神所作

十九日、晴。いつものように疫神を祓うお呪いをした。大教院隆経が来たので、対面して酒を飲ませた。相応院弘助法親王に年賀状を送った。

### 東坊城茂子勾当内侍を通して称光天皇に年賀状を送る



二十日、雨が降った。東坊城茂子勾当内侍を通して、天皇陛下に対する年賀状をお送りした。前々は長資朝臣が朝廷の祝宴に参加する際に口頭で陛下にお祝いを申し上げさせていた。しかし長資は十六日に出仕しなかったため、始めて東坊城勾当内侍を通して賀状を送ったのである。早速、陛下に御披露して下さり、陛下からお返事があったそうだ。光照院良寿房が来た。

二十三日、冷泉正永が参賀に来て、一献の酒を持参したので、酒を飲んだ。酒宴には田向前参議以下、寿蔵主も参加した。正永が酒を持参してくるとは、珍しいことである。新年のお祝いをした。

### 藤六入道の子・三郎が、塔頭御寮惠芳の子犬を殺した

ところで塔頭御寮惠芳は飼っていた犬の子をかわいがっていたが、誰かがその犬を殺した。それで調べたところ、藤六入道の子である三郎の仕業と判明した。御寮はとても怒っていて、三郎を処罰して下さいと訴えてきた。

### 領主が私事の訴訟で家臣を処罰するのは不当である

田向前参議に尋問させたところ、三郎は知らないと言っている。しかし三郎がやったことは明らかなので、最後には自分がやったと自白した。御寮の訴訟を無視するわけにはいかないので、三郎の宮家出仕を停止した。およそ領主が召し使っている者を私事で処罰してほしいと訴えられるのは、いわれないことなのだ。

### 琵琶法師の祖一勾当

二十四日、晴。祐誉僧都が参賀に来て、一献の酒を持参した。それで田向前参議以下、正永らと共に酒を飲んだ。その酒宴の最中、ちょうど良い機会に琵琶法師の祖一勾当が来たので、すぐに平家物語一句を語らせた。その後、風呂に入った。

夜に双六の勝ち抜き戦(※)をした。私・長資朝臣・正永らが双六を打った。長資朝臣が勝って、懸賞品である扇を取った。

※「勝ち抜き戦」…底本では「打ち勝ち」とある。

二十五日、晴。急に連歌会をすることになった。参加者はわずかで、重有・長資朝臣と正永だけだった。

### 正月節養

二十六日、晴。廊御方が節養せちやうの酒宴を用意したといふので、お部屋にお邪魔した。宮家の女性たち・田向経良の妻である芝殿・夫の田向前参議以下、寿蔵主・正永・具侍者らも集まった。

### 琵琶法師の城宇座頭

ちょうどその時、琵琶法師の城宇座頭が来たので、廊御方の部屋に呼び込んで平家物語を一〜二句語らせた。そしていつものように酒宴、そして歌や舞で思い切り楽しんだ。数献終わって、席を立った。

その後、珠侍者が一献の酒を持参した。それでまた酒宴となった。もとより面々は酔っているもので、すぐに無礼講の酒盛りとなり、乱舞になった。終日酒宴が重なり、新年を祝った。城宇には扇を与えた。その後、帰っていった。

二十七日、晴。たいした事はなかった。正永が帰っていった。

二十八日、晴。早朝に用健がいらっしゃった。軽食を準備して下さった。軽食の手配は寿蔵主がしてくれた。去年から佳例として準備して下さっている。それでお祝いをした。芝殿、そして宮家の男どもも参加して、一献の酒宴になった。

松崖が浄金剛院の歎悟を連れて来た。それで少し一緒に酒を飲んだ。昼に京都方面で火事があったようだ。

二十九日、雪が降った。木の梢ばかりに雪が積もり、花が咲いたようだった。とても趣がある。ただし雪見酒は出来なかった。残念である。御湯殿の上で、薪を焼いた。長資朝臣が用意してくれた。

法安寺へお参りした。いつものようにお祈り始めて、仁王経を読んだ。今夜は仙洞御所で今年始めての音楽会があるそうだ。

### 伏見宮家若宮が称光天皇が後小松上皇の養子になるという夢想

田向前参議の娘である田向あやが崇賢門院から戻っていらして、年始の挨拶に来ている。あやの話によると、伏見宮家若宮のことが女院御所で話題になっているそうだ。

正月の始めに真乗寺塔主の恵明房が来て、夢に見たことをお話ししたという。「伏見宮家若宮は才能がお有りなので、天皇の御位に付くことに問題はないだろう。天皇陛下か、または上皇様の養子になられるだろう」と誰かが話しているという夢を見たそうだ。

このことを真乗寺塔主が女院にお話しになり、さらには室町殿のお耳にも入ったようだ。あやがこのように話してましたと田向前参議が伝えてくれた。正夢かもしれないので、めでたいことだ。将来、頼もしい、頼もしい。

二月一日、空は晴れて、風は静かだ。「めでたい兆しがあり、とてもせだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

綾小路前参議がふとやって来た。思いがけないことで、うれしかった。酒を飲んだ。その後、梅林庵へ行き、梅の花を見てまわった。しかしまだ花は開いておらず、面白くなかった。松崖・綾小路前参議・長資朝臣・慶寿丸・梵祐を連れて行った。しばらくして帰った。

宮家で綾小路前参議が用意してくれて、それでまた酒宴になった。二日、晴。早朝に音楽会をした。採桑老・蘇合三帖・蘇合三帖破急・輪台・青海波・千秋楽と朗詠二首をした。綾小路前参議・長資朝臣・慶寿丸が合奏した。音楽会が終わって、綾小路前参議は帰っていった。

### 芝敷地の処分

ところで綾小路前参議は、ご恩地である芝敷地を土倉の宝泉に売ろうと思っているそうだ。この事に関する許可の命令書や事務取扱者の書状などを申請するため、今回、綾小路は宮家に来た。

故綾小路敦有参議入道の二十五年忌が来たる十五日にある。仏事

の費用を捻出するために、芝敷地売却の件を宝泉と相談したそうだ。ただこの土地と関わりのある芝俊阿が反対しているので、協議している最中だそうだ。

### 野鳥が屋内に飛び込むのは怪異

さて日暮れ時分に鶯が常の御所に飛び込んできた。これを捕まえて鳥籠に入れた。およそ野鳥が部屋に入ってくることは怪異である。ただし鶯なら問題ないのかもしれない。吉事か凶事かわからない。

### 鶯の飛び込みはめでたい兆しであった

【頭書】（＝日記の上方の隙間に書き加えた記事）鶯のこと、後になって思い合わされたのは、この翌年、私が親王に任命された件である。鶯は高い木を飛び移る鳥である。つまりこの鶯は昇進のめでたい兆しを示したものであったのである。とてもめでたいことだ。

三日、晴。昨日捕まえた鶯が籠から抜け出して逃げてしまった。残念だ。

さて法安寺住職がこの春は忙しかったので、年始のご来訪をお招きいたしませんでした。そのお詫びということで、酒一献少々を献上してきた。しかし、それは返した。寺家が慌ただしかったのなら、たいそうなことはせず、ただ静かに招き入れればすむことだ。一献分の酒などよろしくないと返答しておいた。そう言い添えて返したのだが、また献上してきた。

およそ崇光上皇の代から毎年法安寺に来訪してきた。ところが近頃は中絶していた。それをたまたま私の代になって再興した。その来訪をまた止めるのは本意でないので、また酒を返した。そうしたらまたまた献上してきた。「そういうことであればなおさら、宮家でお受け取り下さい」と申し添えてきたので、仕方なく受け取った。

### 法安寺の本音

伝え聞くことには、「寺家としては毎年、宮家から来訪があるのは

大変である。このついでに今後の来訪はお止めいただきたい」と酒を持って挨拶に来た僧が念を押していたという。この意見はよろしくないで、再三、酒を返した次第であった。よろしくないことだ。

野遊びに出た。松崖・田向前参議・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。禅照庵に行き、少し酒を飲んだ。しばらくして帰った。法安寺が献上してきた一献の酒を味わった。

四日、晴。前庭に松を植えた。さて今出川家の陽明禅尼に酒樽などを贈った。故今出川公行前左大臣が生前の時も、酒樽を贈っていた。その例と変わらず、年始には今も贈っているのである。

五日、晴。梅を見てまわった。まず退蔵庵、次に蔵光庵、即成院に行った。即成院へは善基が頻りに来るように言っていたので、訪れてみたのである。即成院ではすぐに梅見酒が出された。梅を観ながら酒を飲むのは、面白かった。夕方になって、席を立った。その後、指月庵からの眺望を楽しんでから、すぐに帰った。

#### 庭田重有、眼病を患う

梅見には松崖・長資朝臣・慶寿丸・梵祐らを連れて行った。お供の者が少ない。重有朝臣は眼の病気で、このところ宮家に出てきていない。

七日、晴。松崖が天龍寺へ帰った。用健がいらつしやつたので、梅林庵へ行った。用健・田向前参議・長資朝臣らを連れて行った。梅林庵には留守居の超願寺本慮と小川禅啓らがいた。禅啓が酒を持参していた。本慮がまたお酒のお代わりを持ってきた。楽しかった。

#### 和漢連句

和漢連句を懐紙一折り分詠んだ。私の第一句。

梅いく木 林に余る 匂いかな

華軒好賞春

用健

雲霞む 夕陽の跡に 月待ちて

田向前参議

連句一折りが終わってから、帰った。

ところで関東の叛逆が治まったそうだ。それで昨日、室町殿御所へ大勢の人たちがお祝いに押しかけたらしい。

八日、晴。いつものように風呂に入った。

#### 初詣で

九日、晴。御香宮・若宮・権現に参詣した。正月中いろいろと慌ただしくて、参詣を怠っていた。今日が初詣である。田向前参議・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。

#### 世尊寺行豊に梅一枝と和歌を贈る

十日、晴。前庭の梅一枝を世尊寺行豊朝臣に贈った。去年の春、宮家に行豊がお仕えしていた様子を思い出したと、和歌一首、詠んで送った。

伏見山 去年は慣れにし 宿の梅

人ものばぬ 春を恋いつつ

山里の 住み憂かりつる 宿からに

慣れ見し梅も 思い出ずや

すぐに返事が来た。梅を殊に恐れ多くうれしく存じましたと書いて

寄こした。

うれしさも 匂いも身にぞ あまりぬる

君の恵みの 深き梅が枝 行豊

#### 後小松上皇の義弟・椿睡侍者が来る

十一日、晴。椿睡侍者が来た。この人は日野西資国大納言入道の息子で、称光天皇の母である日野西資子殿の弟だ。珠侍者を供に連れて来た。

対面して、少し酒を飲ませた。この人は後小松上皇様にとっても親しい方で、故徳祥和尚のお弟子さんだ。大光明寺に住んでいるときはお稚児さんで、よく宮家に来ていた。その旧交を忘れずに来てくれた。神妙なことである。

遊山に出た。田向前参議以下を連れて行った。松山で少々小松を掘

り取った。それを前庭に植えた。

十二日、晴。兄・治仁王の年忌法要を型通り蔵光庵で行った。大光明寺に行き、焼香した。長老は留守だった。鹿苑院へお出かけだそう。塔頭・大通院で院主の用健としばらく雑談している間に、長老がお帰りになったという。そしてすぐに長老は大通院へいらっしゃったので、対面した。

### 大光明寺が木幡との境相論を足利義持に提訴する

さて伏見荘と木幡の境界の件で、大光明寺が訴訟なさるそう。それで今朝、鹿苑院で室町殿に関係書類をお見せしたという。室町殿にご意見を伺ったところ、この書類は以前にも御覧になったそう。境界のことは問題ないので、木幡に御使者を出されるとよろしい。その時、幕府政所で訴状を受け取る。もし異論がでたら、その詳細を連絡するようにと、室町殿はおっしゃったそう。室町殿のお考えとして問題がないのは、なによりめでたいことだ。

### 伏見荘境相論は本来、領主の伏見宮家を通すべきもの

ただ境相論は伏見荘全体の問題として伏見宮家から訴訟すべきものである。それを大光明寺から提訴したことは納得できない。しかし寺家として経済的に苦しいので提訴したという。きっと寺家として利得があることを見込んでいるのだろう。去る正月、東松山の松数百本が木幡に盗まれた。それで幕府に訴えて、境界領域を伏見荘方に付けてもらおうという算段のようだ。

### 足利義持の誕生日なので大般若経の法会を行う

今日は室町殿の誕生日なので、大般若経略読の法会があった。それに参列してから、宮家へ帰った。

ところで亡くなった椎野の浄金剛院は、北野天神名号脇絵の漢詩を書いた掛け軸三幅を所持していた。これは妙法院主直筆の掛け軸だ。故念歎上人の時代から所持していたが、亡くなった椎野寺主が他所へ

お預けになったらしい。現在、浄金剛院は住職がいないので、宮家でこの掛け軸を預かると浄金剛院僧の観悟に言っておいた。それが今日、宮家に届けられた。すばらしい品である。大事にとっておこう。

### 足利義持の関東平定お祝いの書状を送る

さて関東が平穏になったことで、幕府関係以外の者もお祝いを室町殿に申し述べているそう。それで勤修寺経興中納言に私の書状を送り、室町殿へこの賀状を差し上げるように命じた。

### 大光明寺の訴訟は不調の模様

【頭書】木幡との境界について、木幡側から反対意見が出たようで、何の措置もとられていない。また大光明寺長老から何の連絡もないので、訴訟は失敗に終わったようだ。

### 藤原能子が山田香雲庵に来る

十四日、雨が降った。前典侍禅尼の藤原能子殿が伏見荘山田にいらした。そのついでに宮家にも立ち寄りということだったが、急ぎの用事ができたとかで、すぐにお帰りになってしまったそう。東御方・廊御方が山田に行った。すでに帰られる途中でなんとかお会いできたそう。たまたまのことなので、宮家に来られなかったのは無念である。

### 山田香雲庵主は老病で死期が近い

その山田香雲庵主は年老いて病も重く、ほとんど死を待つばかりの状態だそう。かわいそうなことである。跡を継ぐ者もないそう。四条隆直の娘である山田香雲庵御寮真幸は去年の冬から実家に戻っており、跡を継ぐこともないらしい。父・隆直の女性問題が発覚した（※）ので、娘の真幸も実家で謹慎しているそう。考えられないことである。

### 琵琶法師の城愛座頭

琵琶法師の城愛座頭が来て、平家物語を一〜二句語った。田向参



議らも平曲を聞いた。

ところで故綾小路敦有参議入道の二十五年忌が明日に迫っている。この法要の遣り繰りが大変だと綾小路信俊前参議が言っていた。しかし、宮家として何も援助することができず、残念である。お茶十袋を綾小路家に贈った。せめてもの芳志である。宮家なのに情けないことだ。

※「女性問題が発覚した」…底本では「姪事につき露見する」とある。前年応永三十年（一四二三）十二月十九日に四条隆直は出家している。十五日、晴。涅槃像を懸けた。いつものように涅槃講の講式を即成院善基・梵祐らが勤めてくれた。涅槃像への捧げ物を宮家の男女が献上した。

水無瀬殿へのお供え物も三種類お送りした。

**山田香雲庵主が亡くなる**

十六日、晴。午後三時、山田香雲庵主がお亡くなりになった。七十二歳であった。かわいそうで、少なからず心が痛む。庵主は故萩原殿直仁親王の侍女であった。古くから宮家のためにも働いてくれており、その点でも惜別の心が募る。

庵主の跡を継ぐ者がいない。すべての事を庵主は廊御方に申し置かれたので、廊御方が没後の事を取り計らって、法安寺松林庵玄忠にいろいろと指示したようだ。

今夜は、即成院の念仏に参列しに行った。

十七日、雨が降った。今日はお彼岸の初日だ。雨が降っていて暇なので、双六の勝ち抜き戦（※）をした。長資朝臣が勝った。すぐに負け態として酒宴をした。

**文字合わせの遊戯は朝廷でも上皇御所でも流行している**

その後、文字合わせ（※）をした。左方は私・娘・今参・慶寿丸、右方は重有朝臣・長資朝臣・梵祐である。負け態は酒海という酒の大

甕だ。結果、左方が二度とも負けた。最近、朝廷でも上皇御所でも文字合わせが流行っているようだ。

※「勝ち抜き戦」…底本では「打ち勝ち」とある。

※「文字合わせ」…底本では「文字書き」とある。後掲二月二十二日条の底本には「文字合わせ」とあるから、この「文字書き」も文字合わせであろう。文字合わせは、漢字を偏・冠・旁に分けて札に書き、これを合わせる遊戯。

十八日、晴。先日の涅槃会の捧げ物を宮家の男・女がくじ引きで各々分け合った。面白かった。

二十日はお彼岸の中日だ。二十日は父・大通院の命日でもあるので、読経後の軽食を男・女、上・下でくじ引きをして、各々が持参した食事をクジに当たった者から順に選び取ることにした。仙洞御所では、お彼岸の読経のたびごとに、このように軽食をくじ引きで取り合っているようだ。

昨夜の文字合わせで負けた左方が、負け態として軽く一献の酒宴を用意した。左方と言っても、事実上、大人は私一人なので、私一人が負けたようなものであろう。それで、私一人で酒宴を用意した次第だ。

**大風で人家が吹き破られる**

十九日、朝から大風が吹き大雨で、雷も鳴った。昼に雨は上がったが、風はなお止まなかった。この風で人家が吹き破られた。京都市内ではさらひどく風が吹いたようだ。

**彼岸読経の軽食をくじ引きで取り合う**

二十日、晴。お彼岸の中日である。先日くじを引いた。軽食を面々が持参しあった。参列者は、東御方・廊御方・上臈・二条殿・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・寿藏主・善基・梵祐・聖乗・中尼らである。私の御前で軽食を食べた。くじで好きな軽食を選んで、面白かった。

塔頭御寮惠芳、奈良の長谷寺より戻る。

塔頭御寮惠芳は長谷寺に参詣していた。そしてちょうど今、お戻りになった。

二十一日、粉雪が時々舞った。とても寒かった。前庭に小松を少々植え直した。

夜に文字合わせの遊びをした。左・右の組に別れて勝負した。いつものように重有朝臣らが参加した。

二十二日、晴れていたが、雪が時々降った。文字合わせをした。私・宮家の女性たち・長資朝臣らで漢字を書いた。右方の女性たちと長資朝臣が負けた。すぐに負け態として右方に酒宴を用意させた。

#### 琵琶法師の城竹検校・城愛座頭

城竹検校が、今春、はじめて来た。平家物語を四〇五句語った。聴衆は田向前参議・長資朝臣・寿蔵主らだった。城愛座頭も同じく平家物語を一句語った。

#### 城竹検校は近く、九州へ行く

城竹は近く九州に行くそうだ。そして来年の秋には京都へ戻るといふ。城竹へのささやかな褒美を勸修寺に命じた。それに扇なども与えた。恐れ多くもありがたいことですよといつつ、城竹たちは退出していった。

#### 朝廷や上皇御所でも連歌会が大流行

京都に出ている長資朝臣が帰ってきて、世間話をしてくれた。朝廷でも上皇御所でも、ご命令で連歌会が何度も行われたそうだ。連歌の道が興隆しているようだ。

#### 今夜も文字合わせで遊ぶ

二十三日、晴。今日はお彼岸の最終日なので、いつものようにお経を読んだ。夜にまた文字合わせをした。先日、宮家の女性たちが負けたのを悔しがって、再戦となった。今度は女性たちが勝った。それで少し

酒を飲ませた。このところ文字合わせを何度も遊んでいる。とても面白い。

二十四日、晴。お願いして、大光明寺の風呂に入れてもらった。その後、塔頭・大通院でしばらく休み、院主の用健と雑談してから帰った。

冷泉正永が来た。明日は毎月恒例の連歌会なので来たという。

#### 北野天満宮法楽の連歌を二百韻詠む

二十五日、雨が降った。毎月恒例の連歌会を当番幹事の長資朝臣と正永が用意してくれた。今日は特別に北野天満宮に連歌を奉納するための会である。会衆はいつもの通りで、午後九時に百韻を詠み終わった。面々は興に乗って、さらに百韻詠もうということになった。それで午前十時過ぎにさらに百韻を詠み終わった。二つの会を続けて面白かったが、疲れてしまった。

二十六日、晴。文字合わせをした。左方が私・田向前参議・重有朝臣。一方、右方は私の娘たち・上臈・二条殿・今参・長資朝臣・慶寿丸・正永・梵祐と大勢であった。それなのに、私たち左方が勝ってしまった。

先日、女性陣が勝った折には、私は負けた。その時の勝負の負け態として、私が今日の酒宴を用意した。

二十七日、晴れていたが、夜に雨が降り出した。昨日の文字合わせで右方の女性陣が負けたので、その負け態で酒宴を用意してもらった。

一献の酒宴が終わって、正永が出ていった。

その後、また文字合わせをした。寿蔵主も参加した。左方は私・娘たち・小今参・長資朝臣・慶寿丸・梵祐。右方は田向前参議・重有朝臣・寿蔵主らであった。今回、女性陣は参加しなかった。左の勝ちが四十三、右の勝ちが四十六で、左方が三だけ負けた。残念だ。負け態として、近日、野遊びで土筆取りをするが、その帰りがけ一献の酒宴を用意することとなった。

二十九日、雨が降った。暇なので、また文字合わせをした。賞品はそれぞれが手の内に持っている物とした。重有・長資朝臣らが参加した。

### 連歌の勝負で銭を懸賞品にしていた記録

ところで別名林鳥御記と呼ばれている後鳥羽上皇の御記録を開いて見たところ、連歌の勝負で銭を懸賞品にしていたという記載があった。後学のため、この記録の内容を記載しておく。

### 後鳥羽院御記

建保三年（一一二五）五月十五日癸酉、空は晴れている。午後一時に外出して茅葺きの家に到る。そこで柿下栗下連歌をして面白かった。銭を賞品にした。普通の句の時は百文、秀句の時は二百文を取った。百韻中、私は数句詠んで、私の分は銭二貫七百文となった。その他、ある者は一貫文あまり、ある者は六〜七百文、五〜六百文取った。面白かった。午後五時に終わった。各々に食事をとらせて、帰らせた。十九日丁丑、雨が降った。諸事、いつもの通り進んだ。午前十一時、いつものように外出した。すぐに茅葺きの家に到り、連歌となった。銭を賞品とした。末代のやり方として銭を賞品にするのは見苦しいようだが、朝廷の賭弓のりゆみの時には弓射した分、銭を賭けている。ただしこの事は、連歌で銭を賭けることの先例にはならないだろう。十一月十一日丙寅、雨が降った。南屋で連歌会があった。銭を賞品とした。これは、いつものことである。近代は銭を賤しいものとしているので、銭を賭けるのは謂われのないことのように見える。しかし、昔から銭を賞品にしていたのである。午後一時に連歌会は終わった。後鳥羽上皇の御記録は面白いので、書き写しておいた。およそ近代、上皇御前の連歌会で銭を賞品にするのは下品でよろしくないものと言われており、銭を賭けることはなかった。上代でさえこのような状況だったのだから、末代の今となつてはなおさらであろう。しかし本来は下品なことではなかったといえよう。

### 野遊びで土筆を採る

三月一日、晴。「良い兆しがあり、すべての事がめでたい」と予祝した。その後、野遊びに出た。先日文字合わせで私が負けた。その負け態で野遊びと酒宴の用意をした。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主・梵祐を連れて行った。三栖あたりでもたくさんの土筆が採れて、楽しかった。

### 下馬しない土民

帰り道、村人一人と出会った。馬に乗っているので、下馬しなさいと命じた。ところが、頑として下馬しない。私はとても腹が立った。それをみて、連れていた村の若者たちが、その男を馬から引きずり降ろして、殴ろうとした。しかし、それではやり過ぎなので、若者たちを制止して、その男を追いやった。

土筆を採って帰って、すぐに一献の酒宴をした。負け態をしっかりと勤めたのである。とても面白かった。その後、みんな雀の小弓を射て遊んだ。

### 雀の小弓で矢開きの祝宴をする

二日、晴。今日も雀の小弓を射た。私・息子・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸らで弓を射た。息子の矢が二回も的に当たった。初めての命中なので、矢開きのお祝いをしましょうと皆が言った。それですぐに酒宴となった。とても面白かった。

### 桃の節供に闘鶏をする

三日、晴。「桃の花の祝宴で、とても幸せだ」と予祝した。特に闘鶏をした。その後、大光明寺へ行き、花を遊覧してきた。田向前参議・長資朝臣・慶寿丸・梵祐を連れて行った。

### 和漢連句

花の下で用健・衣鉢侍者も来て、記録しない和漢連句を詠んだ。私の第一句。

花も雪 枝も旧りたる 老木かな

貴遊春尚新

鶯歌如有喜

衣鉢侍者

第四句・五句は田向前参議・長資朝臣らが付けた。その後、用健と

用健

一緒に指月庵へ行つた。その後、馬場の花を遊覧して帰つた。

宮家に着いたらすぐに御節供のお祝いをした。用健も一緒に、田向前参議にも参列した。三献の酒宴が終わって、用健はお帰りになつた。

夕方に門前の花を観た。上臈・二条殿も同じく花見をした。次に女性たちは田向家へ行つた。そうしたら田向前参議が来て、私も田向家へ来るように言つた。遠慮すると答えたが、頻りに言うので、行くことにした。田向家に着くとすぐに酒が出てきて、二・三献の酒宴となつた。今年になっていまだ私を招待していなかったたので、この機会に新春の礼を表したつもりのようなのだ。にわかなことであつたが、かえって面白かつた。酔つたのですぐに帰つた。

### 赤松持貞の妻女一行が大光明寺で花見狼藉をする

さて聞くところによると、今日の夕方、大光明寺に花見の客が大勢押し寄せたそうだ。女房の乗った輿が七丁。花の下に、輿を据え置いた。結局、その花の下で花見酒を飲もうとしていた。また女房の下部が花の枝を折つた。

それで僧の下部らが寺中では禁酒であることや花の枝を折ることも禁止されていると注意した。それに対して、女房の下部が腰刀を抜こうとしたので、同僚がそれを止めた。それで何ごともなく、花の枝も僧が取り返したという。この一行は、赤松持貞越後守の妻女たちだつたらしい。

【頭書】 今日から琵琶を百日間稽古するよう企てた。

### 御牛飼いの虎石丸入道が死ぬ

四日、晴。御牛飼いの虎石入道が去る三十日に死んだそうだ。牛飼いの下部がこの事を報告してきた。かわいそうなことだ。昔から宮家に仕えていてご苦労なことだったので、形ばかりの恩給を与えていた。

虎石の成人した子息が上皇御所で召し使われていたところ、思いがけない振る舞いがあつて、上皇様から譴責され、逃亡した。それが原因で、老父の虎石丸も同じく上皇様から召し使われなくなつてしまつた。そのため、この御所からの恩給で何とか今まで生きのびてきた。

このように、代々宮家に仕えていた古老の者であつた。とてもかわいそうだ。

### 小弓を射る

夕方に小弓を射る遊びをした。参加者はいつもの面々である。宮家の女性たちは大光明寺の花を遊覧しに出かけた。

五日、晴。上巳の祓えを陰陽師の賀茂在方朝臣がいつものように献上してきた。慶寿丸が琵琶で壹越調の曲を習い始めた。

四条隆盛朝臣が今日、昇進したそうだ。数人の先任者を飛び越えての昇進だそうだ。

六日、晴。前庭の花が盛りだ。それで、花見のために宮家の男女各々が肴一種と酒瓶一つを九日に持ち寄るよう命じた。長資朝臣にこの件を取り仕切らせた。それにまた和歌の題を出して各々に短冊を配つた。

御香宮の馬場の花を遊覧した。すばらしかつた。

さて重有朝臣のご恩地支配に対して、私の代になつて承認書をまだ出してないので、お書き下さいと願ひ出てきた。それで今日、私自身書いて与えた。恐れ入りますと言つて、お礼のお酒を献上してきた。七日、曇つていたが、夜に雨が降り出した。宮家の女性たちが門前で花見をしていたので、私が酒を出してあげた。先日梅見の際に女性たちがお酒を出して下さつたので、そのお礼である。近日は、このようにお互いがお礼しあつている。麗しいことであろう。



## 花見酒と和歌の披露

九日、朝、風が吹き激しく雨が降った。花を散らす乱暴な雨である。前もって命じておいたように、宮家の男女が肴一種と酒瓶一つを献上してきた。献上してきたのは、東御方・廊御方・上臈・二条殿・塔頭御寮恵芳・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・寿藏主・善基らである。惣得庵主も呼んだら、一献の酒を持って来た。まず三献の酒宴をして、和歌を披露した。

## 貞成、腹痛で縁から落ちて失神する

和歌の披露が終わったら、突然、私のお腹が痛み出した。それで席を立って、西側の縁に座っていたら、縁から庭に落ちて気を失ってしまった。その間のことは記憶にない。

## 貞成、蘇合丸を飲んで回復する

御寮恵芳がそれを見付けて、皆に知らせてくれたそう。人々はびっくりして走り寄り、体を起こして水を飲ませた。それで、意識が戻った。縁側が上がって、蘇合丸を飲んだ。その後、回復した。不思議なことだ。まだ酔ってもいないのに、とてもおかしなことである。

その後また一献そして数献の酒宴となり、さらに酒盛りとなった。いつものように歌や舞もあった。花見酒を型通り行い、面白かった。十日、晴。いつものように御香宮猿楽があった。楽頭は矢田が務めたという。三番の猿楽が演じられたそう。松崖が見物のために来られた。

## 畠山持国最愛の稚児

十一日、晴。御香宮猿楽も昨日と同様だ。畠山持国弾正少弼が猿楽見物に来たそう。猿楽の役者の中に稚児がいる。この稚児を畠山少弼がもっとも愛しているという。猿楽が終わって畠山少弼は稚児と一緒に帰り、松原で酒盛りをしたそう。この酒盛りは畠山の家臣である三木善理が取り計らったよう。だ。

## 公家人疲労のことを狂言で演じる

さてこの御香宮猿楽の間狂言で、公家が経済的に困窮してくだびれている様子をいろいろと真似して演じられたそう。このことはよろしくない。田向前参議が小川禅啓を通して楽頭の矢田を譴責した。

## 伏見荘は皇居なり

この伏見荘は、皇族が住んでいる場所(※)である。このように公家が居住している場所で、公家が困窮している様子を種々、面白おかしく演じるというのは、古くからの仕来りを弁えず、大変失礼なことである。それで今後のために譴責させたのだ。

## 比叡山で猿を擲した役者が刃傷された

このようなことは、別の先例にもある。比叡山延暦寺で猿楽の役者が猿(※)の物真似を面白おかしく演じたことがあった。それで延暦寺の僧兵が、この猿楽の役者を斬り付けて怪我をさせたそう。

## 仁和寺御室門跡を擲した役者も処罰された

また仁和寺でも、猿楽狂言で聖道(※)法師のことを面白おかしく演じたことがあった。その猿楽の役者も、仁和寺御室御所から処罰されたそう。

このように皆、狂言を演じる場所について考慮すべきなのである。このような仕来りを弁えないというのは、けしからぬことだ。

御香宮楽頭を追放する命令を発した。しかし楽頭はまったく知らないことでしたという陳謝している。よろしくない事である。

※「皇族が住んでいる場所」：底本には「皇居」とある。

※「猿」：猿は比叡山の鎮守日吉大社の使者である。

※聖道(しょうどう)：仁和寺御室第十七世承道法親王(一四〇八〜一四五三)のことであろう。後小松上皇の養子で、木寺宮恒王の王子、この当時の御室門跡当主である。承道にどのような擲される事績があったのかは、未詳。「聖道(承道)法師」とは、狂言役者が実際に用いた不敬な呼称であろう。

### 遊山で紫蔵(ゼンマイ)を採る

十三日、曇っていたが、夜に雨が降り出した。遊山でゼンマイを採った。田向前参議・重有・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主を連れて行った。松原でゼンマイを採った。ところが塔頭御寮恵芳・智俊・女官の目々らが私たちより先にゼンマイを採っていた。合流して、すぐに一緒にゼンマイ採りをした。

寿蔵主に命じて酒樽を取り寄せた。松原の野原に座って酒を飲んだ。比丘尼たちも一緒に酒を味わった。面々が面白がって、少し酒盛りになった。

夕方、宮家に帰った。そうしたらすぐに塔頭御寮恵芳・智俊らが酒海という大きな酒甕を持参して来た。とりあえず松原でのお酒のお返しだとう。面白かった。それでまた酒を飲んだ。

十四日。晴。惣得庵主が一献の酒を持参して来た。先日の花見の時、参加者として肴一種と酒瓶一つを進上しなかった代わりだそう。それで先日の花見の面々を皆呼び出した。一献が数献の酒宴となり、面白かった。

### 細川満元節養の酒宴で赤松義雅が将軍近臣の安東某を刺殺する

ところで後に聞いたところによると、今日、細川満元前管領の屋敷で喧嘩があったそう。節養の酒宴に赤松一族を招いて、大宴会を開いていた。その参加者である将軍近臣の安東某が酔い臥せっていたところを、赤松義雅左馬助が刺し殺して逃亡したそう。

それで安東の同僚たちが赤松の屋敷に攻め込もうとした。しかし、それを将軍が押し留めた。そして赤松左馬助に切腹するよう将軍が命じたそう。しかし赤松はどこかに雲隠れしたので、とりあえず騒ぎは収まったという。

十五日、晴。朝廷で地方官の任命式が始まった。執筆役は二条持基左大臣だそう。

十六日、晴。いつものように風呂に入った。そして恒例の即成院念仏に参列した。

### 観音経を一字三礼して書写する

十八日、晴。奈良の長谷寺に奉納するため、一字三礼(※)して観音経を書写した。同じく願書も書いた。近日、宮家の女性や男どもが長谷寺に参詣するので、その時に奉納するためである。

行豊朝臣が来た。しばらく雑談して、少し酒を飲ませた。

ところで庭田家へ急に行くことになった。庭田家前庭の遅桜を見るためだ。毎月恒例の連歌会、今月は庭田重有朝臣が当番の幹事である。それも兼ねて、庭田家の遅桜見物を準備したそう。とても面白かった。連歌会の参加者はいつもの面々だった。ちょうど行豊朝臣も来ていて都合が良かったが、行豊は急用ができたと言って、帰ってしまった。残念なことだ。重有は一献の酒宴を丁寧に準備してくれた。深夜に百韻を詠み終わった。

聞くところによると、今朝、室町殿は伊勢神宮へお出かけになったそう。

※「一字三礼」：一字書写するごとに三度礼拝すること。底本には「一合三礼」とある。

### 行蔵庵寿蔵主と即成院善基との対立

十九日、晴。寿蔵主と即成院善基が対立している。問題となったのは、行蔵庵の下部が即成院が管理している山に入って芝を刈ったことにあるようだ。その下部を善基が見咎めて、下部が持っていた芝を奪い取った。その下部は行蔵庵に帰って寿蔵主や珠侍者に報告した。

それに腹を立てた寿蔵主が宮家御所に来て、事の次第を訴えた。善基もまた宮家に来て事の次第を訴えた。両方が相論となった。田向前参議や重有朝臣らが双方を宥めた。

それに対して寿蔵主は「結局、宮家は善基をご鼻頂にしているので、

この御所の裁定では解決しないだろう。上皇御所へ申し入れて、室町幕府の裁判にしたい」と言って、出ていった。

一方、善基は「この程度のことでは幕府の裁定を仰ぐというのはおかしな話だ。御領内のことなのに、領主である宮家の裁定を待たずに上皇御所へ訴えるというはおかしな話だ。ここは、権力者として宮家の勢威を示すべきではないでしょうか。変な話だ」と言っている。善基の言っていることが、もっとも道理に適っている。

【頭書】この件について、その後、話は拡がらなかった。寿蔵主は白川伯二位資忠王に訴えたが、二位殿はその訴えを認めなかった。もし上皇御所に訴えたとしても、上皇様は訴えをお聞き入れにはならないだろう。いずれにしても伏見宮家の裁定に従うべきだと論じたようだ。その後、寿蔵主からは何も言っていない。とてもよろしくない事である。

### 寿蔵主は白川資忠王に、即成院は泉涌寺に、それぞれ訴えるという

二十日、晴。田向前参議と重有朝臣の二人を使者として即成院と行蔵庵に派遣した。今回の対立を宥めさせたのである。二人の使者が帰ってきて言うことには、寿蔵主が京に出て白川伯二位に訴えに言ったそうだ。これは想定内のことだ。即成院では院主の梵基が泉涌寺に訴えると言っているようだ。

二十二日、雨が降った。宮家の女性たちが長谷寺に参詣するのは、明日と決まった。参詣するのは、私の娘の阿五々と目こ、東御方・上臈・二条殿・今参・長資朝臣・寿蔵主・宿の手配をする善基・梵祐・女官の目々らである。餞<sup>はなむけ</sup>として一献の酒宴を開いた。それで参詣者が集まった。ところが寿蔵主は呼んでもやっつてこなかった。思うところがあつた。私としては形ばかりの礼を尽くしたつもりである。

### 止雨の祈祷として武徳楽を百回弾く

雨が降っているので、明日は晴れるように祈念して、武徳楽を百回弾いた。その他、雨を止ませる呪文なども唱えて祈念した。

### 宮家の女性たちが長谷寺に参詣する

二十三日、曇ったり晴れたり、はつきりしない。朝早く長谷寺に参詣する人々が無事に出発なさった。この二〜三年の念願が実って、めでたいことである。私も願ひ事があつて、一字三礼書写の観音経一卷・願書・御灯明などを進上した。御経と願書は奉納するように頼んでおいた。宿の手配などは善基に任せよう。留守で宮家に残っている人々は廊御方・田向前参議・重有朝臣・慶寿丸らである。

昼に激しい雨が降り雷が鳴り、風も吹いた。参詣の長旅についている人々の苦勞は察するに余りある。慌てて、武徳楽百回をまた弾いた。慶寿丸も同じく弾いた。

### 暴風雨は天一神の塞によるものか

今日は、天一神(※)が地上に降りており、塞のある日である。このことを考慮しなかったのは、間違ひであった。このような良くない日なので、風雨の障害が起こったのであろうか。不審なことである。

後日に聞いたところでは、長旅の途中雨風がひどくて途方に暮れたそうだ。娘たちや女性たちは散々な目にあつたようだ。それでも奈良には無事到着して、面々にはとりたてて問題はなかつたという。

### 後小松上皇、千句連歌会を主催する

これも聞いた話だが、今日、上皇御所で千句の連歌が始まつたそうだ。明後日に千句を読み終わる予定だという。以前から、この千句連歌会を開きたいというお考えだつたそうだ。千句も詠むのは初めてのことだ。

このところ、このように連歌が流行っている。きっと天神様もこの連歌を喜んで受け入れて下さることであろう。

※天一神(なかがみ)：曆神。底本では「指神」(さすがみ)と記している。この神が地上に居る方角を塞(ふたがり)といい、この方角に外出する際は方違えをする。

二十四日、晴れていたが、昼にまた雨が少し降った。用健がいらっしゃった。具侍者も同じく来た。これは宮家の女性たちが留守にする間のご配慮であった。廊御方・塔頭御寮惠芳・田向前参議・重有朝臣らが話し合って用意したことだそう。それで酒宴となった。

### 琵琶法師の安一座頭

琵琶法師の安一座頭が来た。ここ四〜五年来ていなかった。珍しい来訪である。一献の酒宴の間、平家物語を語ってくれた。

二十五日、晴。安一座頭が伏見に居るので、平家物語を語らせた。留守番の間の徒然を慰めてくれた。

### 安一座頭を領地の近江国塩津荘に宿泊させる

安一は近々、尾張国に行くそう。それで近江国塩津荘御代官熊谷に命令書を書いてほしいとのことだった。御領内の塩津荘に宿泊したいそう。それで祐管僧都にそのように命令しておくことと安一に約束した。

### 長谷寺参詣者を宇治で坂迎えする

二十六日、晴。朝早く生島明盛が来た。今日は宮家の女性たちが長谷寺から帰ってくる日である。その坂迎え(※)をするために明盛は来たそう。神妙なことである。

坂迎えの場所である宇治まで皆で行き向かうそう。そして平等院で一献の酒宴を用意するという。その参加者は田向前参議・重有朝臣・慶寿丸・禅照庵主、村人では明盛・行光・小川禅啓・下野良明(ただし良明本人は不参加で子息が代参した)・三木善国・三木善理(これも子息が代参)・三木善康・広輔・禅光らだそう。この他、土倉の宝泉や北蔵らも加わるらしいが、代参のようだ。

惣得庵主が酒樽一つを持ってきた。芝殿も酒を持ってきた。面々が留守を慰めてくれるのは、うれしいことである。一緒に酒を飲んだ。禅啓もまた宮家に酒を手配してくれて、数献の酒宴になった。

午後七時半に参詣の面々が戻ってきた。皆、無事に帰ってきた。娘

たちも特に変わったこともなく、初めてのお寺参りを無事にすませて、めでたいことだ。

二十三日の暴風雨の話になった。慌てて、どうしたらよいか分からなかったようだ。梨間と宇治の両所で一献の酒宴があり、そこに逗留したという。

※坂迎え(さかむかえ)：遠い旅から戻る者を村境などで出迎えて、酒宴をすること。

二十七日、晴。長谷寺のお土産を宮家の女性たちがそれぞれ献上してくれた。善基が酒宴を準備した。神妙なことだ。

二十八日、晴。宇治での坂迎えのお返しを宮家の女性たちが準備した。善基がその差配をした。先日の坂迎えの人々が皆集まった。村人たちも宮家に上げた。大酒を飲んで、乱舞になった。皆が酔い狂って、とても面白かった。夕方にお開きとなった。

二十九日、晴。三月も終わりで名残惜しい。一座に集って和歌を詠むこともなく、残念だ。昨日の二日酔いで、私も呆然としている。

### 貝合わせで遊ぶ

四月一日、曇っていたが、小雨が降った。「初夏のはじまりで、すべてにおいて、とても幸せだ」と予祝した。いつものように、月始めのお祝いをした。一献の酒宴を終えてから、娘たちや宮家の女性たちと貝合わせで遊んだ。

### 九歳の長女を入江殿に寺入りさせる

二日、雨が降った。さて私の九歳の長女を尼寺の入江殿に入れることについて、去年、内々に室町殿へお伺いを立てた。そうしたら、問題はないとのこと返事だった。それで今月中にお寺にお入りくださいと、入江殿ご住職が連絡してきた。

### 大將軍の北方塞がり

ただし今は大將軍が北を塞いでおり、伏見からみて京は北に当たる。



そのことを陰陽師の賀茂在方朝臣に尋ねたところ、返答して言うことには「大將軍の方位については問題ありません。お寺入りなどについては、それほど方位塞がりを感じさせることはないと思います。その上、京都は伏見からみて真北には当たりません。宇治も都の辰巳（南東）というではありませんか。それと同じことです。すぐに御寺入りなさるのがよろしいと存じます」ということだった。

それで今月中に寺入りすることに決めた旨、入江殿に連絡した。御出立の支度で慌ただしいことになる。

中原諸勝大外記が地方官任命式の記録を献上してきた。先月十七日が任命式の最終日だった。その後、いつものように風呂に入った。

### 登蓮法師旧蔵の万葉集

三日、代々、大切にしてきた御本である万葉集を開いて見たら、第一巻が欠けていた。第二巻も欠けていたが、これは元より欠本だったので、別の本から書き写されて補われていた。

それで第一巻を他の本から書き写して補充することにした。悪筆であるが、私が自筆で書写することにした。この万葉集は大昔の歌人である登蓮法師が所持していた本だそう。代々大切にしてきた物なので、私も特に大事にしている。

### 花園天皇の御寝台

ところで父・大通院の時に椎野寺主に預けていた萩原殿直仁親王の御寝台を、今日、椎野が住職をしていた浄金剛院から取り寄せた。これは、もともと直仁親王の父である花園上皇の御寝台であった。代々伝わる古物である。

### 香雲庵主旧蔵の平家物語十一帖

また香雲庵主が所持していた平家物語十一帖がある。これは第六帖が欠本なのだが、廊御方が私に進上してきた。香雲庵主が亡くなった今となつては持ち主のいない本なので、私に進上することだった。

た。

四日、晴。入江殿に娘を入れる日はいつがいいか、陰陽師の賀茂在方朝臣に尋ねた。そうしたら在方は、今月十九日・二十二日、また六月十一日が吉日だと答申してきた。これ以外に夏の間は吉日がないとも言っていた。

### 瑛蔵主が結夏の乗払をする

五日、晴。田向前参議の息子である瑛蔵主が夏の修行期間の始めに説法をするという。その説法の練習を聞くために田向前参議が京都に出かけた。そして夕方に帰ってきた。練習では特に問題が無かったそう。六日、晴。後伏見上皇の祥月命日の御仏事、今年は浄金剛院が当番の年である。しかし椎野寺主はお亡くなりになっているので、寺には住職がいらない。それで先例に任せて浄金剛院の寺僧たちに法事讀を執行させた。事務取扱者は綾小路信俊前参議である。

### 尾張国黒田荘

尾張国黒田荘の課役收取を常徳院にやらせているが、毎度、出し渋っているそう。何度も現地の役人と問答しているそう。よろしくない事である。

八日、晴。大光明寺仏生会には参列しなかった。それで大光明寺は誕生仏を宮家に送って寄こした。以前は誕生仏を花堂に入れてあったが、今回は誕生仏だけを送ってきた。怠慢の至りだ。

### 醍醐と石山寺の山境をめぐる合戦

十日、曇。聞いたところによると、醍醐から石山寺に軍勢が押し寄せて、合戦となったそう。しかも、今日にいたるまで三度も押し寄せたらしい。今日の合戦では、寄せ手の醍醐の軍勢に死人が三人、負傷者が多数でた。石山方でも多数が殺されたという。事の起こりは、醍醐と石山との山境の争いなのだそう。

十二日、曇。夜に入って落雷で震動があった。雷が間断なく光った。そ

れで空が光り輝き、まるで日中のようなようだった。このような天候が午後七時半から午後十一時半まで続いた。そしてその後は晴れた。恐ろしくて、肝を冷やした。

十三日、晴。いつものように風呂に入った。娘のあ五々を来たる十九日に尼寺の入江殿へ入れる事が決まった。餞のためにあ五々を田向家に送った。東御方と二条殿が付き添っていった。

#### 判相人が来る

十四日、晴。人相見が来て、私の人相を見た。すばらしい人相だと言っていた。ただし眉毛を書き直した(※)。

惣得庵主と明元らが来た。娘の餞のため、一献の酒を準備して下さった。田向前参議らが酒宴に参加した。

※「ただし眉毛を書き直した」：底本では「いささか点を直す」とある。

#### 田向経良の子・瑛蔵主の説法

十五日、晴。夏の修行期間の始まりにあわせて、相国寺で説法があった。田向経良の息子である瑛蔵主の説法は無事に終わったところか、とてもすばらしかったそうだ。母親の芝殿や惣得庵主らも説法を聞きに行ったという。

#### 伏見荘の荘民と槇島の民衆との喧嘩

ところで、夕方に喧嘩があった。伏見荘の荘民が槇島に行つて草刈りをしたそうだ。そこへ槇島の民衆が出会つて、草を刈っている荘民に殴る蹴るの暴行を加えた。荘民は宇治川に追い込まれ、逃げ出した。さらに敵方槇島の二人が船に乗って伏見荘まで追いかけてきた。舟津で荘民たちが引き返して合戦となったところ、伏見荘の村人たちが大勢出てきて、敵の二人を殴りつけて捕まえた。そして、敵の船も壊したそうだ。現地の騒動について詳しく話を聞いたところ、だいたい以上のような状況だそうだ。

事の起こりは、伏見荘の者どもが他郷へ行つて草を盗み蒔ったことにあり、よろしくないことだ。槇島の二人を解放するように命じたところ、蔵光庵主が槇島惣官と知り合いだということで、蔵光庵の僧二人を付き添わせて、捕まえた二人を送り届けさせた。ところがまた槇島惣官からも二人の使者が送られてきて、その二人を迎えに来て、詳しい事情を尋ねてきた。それで小川禅啓と三木善理に詳しく説明させて、送り返した。蔵光庵主の取り計らいで、特段事なきを得た。それにしても思いがけない喧嘩であり、とてもよろしくないことだった。

十六日、晴。賀茂祭である。典侍の役は中山満親の娘だそうだ。私は御香宮に参詣した。

#### カッコウの初音

さて、カッコウが今日、今年初めて鳴いた。それに一日中、何度も鳴いていた。去る応永二十八年(一四二一)にもこのように終日鳴いていたが、特段、変なことは起こらなかった。先例としては問題ないということであろう。

即成院念仏会に参列した。

十七日、雨が降った。寿蔵主が来た。入江殿が私の娘を養つて下さる準備をなさっている。そのことで、東御方のお部屋で一献の酒宴を設けた。この娘は東御方が特に養つて下さっていた。娘の御服なども度々進上して下さった。そのお礼として、東御方のお部屋で酒宴を準備したのである。

#### 九歳の娘・あ五々が入江殿に入る

十九日、晴。私の九歳の娘が入江殿に入った。入江殿のご住職は崇光上皇の娘である。廊御方が娘のお供をして入江殿まで行かれた。同じ輿に乗つて行く。内々の事なので、行列を整えなかった。娘の御服なども至つて粗末なものである。

朝早く一献の酒宴をした。これは宮家の女性たちや重有朝臣が御餞

のために用意してくれたそうだ。芝殿や物得庵主らも来た。午後一時半、娘たちは御出発した。すべて無事に執り行われて、めでたいことである。

### 入江殿が本来の皇室の尼寺に戻る

最近の入江殿には故鹿苑院足利義満殿の御娘が入って以後、足利家の娘さんばかりが入っていた。それをこの度、皇室として取り返した次第である。現住職は、崇光上皇の皇女として大性院にお入りになった後、入江殿のご住職におなりになった。私の娘は、このご住職の御弟子として入江殿に入ったのである。入江殿が皇室の寺という本来の姿に戻ったのは、すべて仏様の思し召しといえよう。とてもうれしいことである。

夕方になってお供の人々が入江殿から帰ってきた。入江殿の寺中では尼たちが大騒ぎで、光照院殿も見物にいらっしやっていたそうだ。晴れがましい様子だったと語っていた。廊御方はそのまま入江殿に逗留し、明後日にお帰りになるそうだ。

二十日、晴。豊原郷秋が来た。今年になって初めてのことだ。四月になるまで宮家に来なかったのは、けしからぬ事である。音楽会をした。平調の万歳楽・三台急・甘州・春揚柳・五常楽急・太平楽急・林歌を演奏した。長資朝臣と郷秋が笙を吹いた。田向前参議が太鼓を打った。琵琶は慶寿丸が弾いた。郷秋は初めて慶寿丸の琵琶を聞いた。慶寿丸には音楽の才能があると頻りに褒めていた。音楽会が終わり、酒を与えたら、郷秋は帰っていった。今日は大臣任命の祝宴が行われるそうだ。

### 室町院領備中国大島保

ところで、芳徳庵主が次のような話を取り持ってきた。室町院領備中国大島保四分一を支配することを、猪隈僧正の弟子である中納言阿闍梨寛禪が望んでいるそうだ。この大島保は町経時治部卿が伝え持っている。その四分一を光照院経増が受け持っていたが、先年、その経

増がどこかへ逃亡してしまった。それで、大島保全域を町経時に預ける命令書を与えたのであった。ところが、経増が戻ってきた後、この四分一を阿闍梨寛禪に譲ったという。その譲状などの関係書類を持って寛禪は支配の復活を望んでいるそうだ。

この寛禪は芳徳庵主の親類だという。それで芳徳庵主が特別にお取り成ししてきたので町経時に連絡したところ、すでに命令書をお下しになっているのに、それを取り返そうとなさるのは軽々しいお裁きだと反論してきた。それなので、今回の支配復活は叶わないと命じたところ、阿闍梨が来て、なおも願い出てきた。正当な書類があつてこちらに道理があるのだから、四分一を返してほしいと言ってきた。なおなんとか町経時に言ってみようと返答しておいた。

### あ五々、入江殿御喝食となる

二十一日、晴。重有朝臣が入江殿に行った。夕方に廊御方が帰ってきた。今日が吉日なので、娘を御稚児になさったそうだ。御戒師が決まっていなかったので法名はまだ付けてはいない。まず御髪だけを住職の部屋で切り揃えなされたそうだ。

その儀式に尼たちが大勢参列した。尼たちはいかがでしょうかと娘を敬ったそうだ。寺の中で尊く賑やかな儀式であり、まるで大名のような騒ぎだったそうだ。代々の由緒といい、今回の名誉といい、とてもうれしい限りだ。

御稚児は故郷を恋しく慕って、涙を落としたそうだ。心中を察して、かわいそうに思う。この二三日は慌ただしく故郷のことも御稚児はお忘れになっていたようでしたと、廊御方は語っていた。

### 任大臣節会

二十二日、晴。重有朝臣が帰ってきて、世間話をしてくれた。一昨日の大臣任命の祝宴、二条持基左大臣が関白に、一条兼良内大臣が右大臣に、洞院満季右大将が内大臣に、それぞれ転任したそうだ。

九条満教が七年間も閑白でいたことを、室町殿はいささか不快に思っていたそうだ。それで閑白が交替することになったらしい。

室町殿御所では御修法が行われたという。

### 備中国大島保四分一を寛禪に与える

二十三日、晴。備中国大島保四分一を中納言阿闍梨寛禪に与える命令書を出した。命令書は重有朝臣に書かせた。寛禪はお礼として酒一献分の銭を献上してきた。町経時朝臣は怒っていたが、領主である私の意向であるなら仕方ありませんと言ってきた。

二十五日、晴。等持寺法華八講が今日始まったそうだ。

中原師勝朝臣が大臣任命記録を献上してきた。任命履歴を書き直すように命じておいたが、その書き直した記録をただいま進上してきたのである。

### 火神が動き地震となる

今夜、地震があった。小さな地震である。火神が動いたようだ。

二十六日、晴。いつものように風呂に入った。瑛蔵主が来た。説法がうまく行ったことのお礼を言いに来たのである。

二十八日、晴れていたが、夕方になって雨が降ってきた。連歌会をした。毎月の当番幹事を今月は決めていなかったたので、私が連歌会を主催した。参加者はいつもの面々である。夕方前に百韻が終わった。

### 廊御方局女の中殿が引退する

二十九日、雨が降った。廊御方の局女である中殿が今日、引退した。山田香雲庵に移り住むそうだ。父・大通院の時代から廊御方にお仕えして、雑事をこなしてきた。しかし余りにも老衰したので、引退することになった。かわいそうなことである。この老尼は、四条家の女性で、亡くなった四条隆持卿の妾であった。既に八十歳に及ぶので、老衰するのは当然なことだ。

### 槇島惣官に修理した舟を返す

ところで槇島との喧嘩の際に、槇島の舟を伏見荘の荘民が壊してしまった。これはよろしくないことなので、厳しく命令して修理させた。そして今日、槇島惣官にその舟を返した。惣官は畏まっていた。舟を壊したお詫びとして伏見荘の村人たちから酒樽などが献上されたので、それをすぐに味わった。

(続)